

# 学位論文抄録

BEDアッセイを用いたHIV感染症の早期診断の動向解析  
(Trends in early diagnosis of HIV infection analyzed by BED assay)

林 田 庸 総

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻エイズ先端研究者育成コース

指導教員

岡 慎一 客員教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻エイズ学 IX

## 学位論文抄録

**【目的】**human immunodeficiency virus (HIV) 感染症の早期診断および治療は、acquired immunodeficiency syndrome (AIDS) の発症を防ぐこと、そして感染の拡大を阻止することに対して極めて重要である。しかしながら多くの場合は HIV に感染した時期を特定できないため、HIV 感染症の早期診断が促進されているかどうかは通常分からない。本研究の目的は、東京において HIV 感染症の早期診断が促進されてきたかを調べることである。

**【方法】**本研究の対象者は、2002 年～2010 年に、HIV 陽性が判明してから 30 日以内に国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センターを受診した、抗 HIV 治療未経験の、研究用採血の同意が得られた 809 名である。対象者の保存血清または血漿を用いて、BED アッセイという手法により recent infection (抗 HIV 抗体陽転から平均 197 日以内の早期診断例) であるか否かの判定を行った。

**【結果】**809 例のうち 197 例 (24.4%) が recent infection であった。recent infection 群は平均年齢が 33.0 歳であったが、chronic infection 群の平均年齢は 37.2 歳と高かった。recent infection の年次推移を見ると 2008 年が 31.9% で最も高く、次いで 2007 年が 26.1% であった。2002 年～2006 年、2007 年～2008 年、2009 年～2010 年の 3 期間に分けて解析を行ったところ、推定感染経路が同性間性的接触である群は異性間性的接触の群よりも 3 期間の全てにおいて recent infection の割合が高かった。また日本人の群は外国人の群よりも 3 期間の全てにおいて recent infection の割合が高かった。これらの全ての群で recent infection の割合が最も高かったのは 2007 年～2008 年であった。本研究の対象者の 85% を占める men who have sex with men (MSM) において詳細な解析を行うため、MSM を 29 歳以下の群、30 歳～39 歳の群、40 歳以上の群の 3 群に分けて 1 年毎の recent infection の割合を調べた。29 歳以下の MSM の群では recent infection の割合は 35% 前後と高かった。一方 40 歳以上の MSM の群では recent infection の割合は 10% 前後で他の群よりも低かった。しかし 2007 年に 25.9%、2008 年に 35.3% と急上昇し、30 歳～39 歳の MSM の群を上回った。だがその後 2009 年には 16.7%、2010 年には 14.7% と再び低い割合となった。また HIV 検査の経験の有無や受検頻度が recent infection に有意に関係していた。

**【考察】**若い MSM において HIV 感染症の早期診断率が高いことは、自身の性行動のリスクを理解して HIV 検査を頻回に受けていることが関係していると考えられる。一方、高齢の MSM においては早期診断率が低いと 2007 年と 2008 年に急上昇したことが判明し、この時期に行われた HIV 検査を促す取り組みが効果的であった可能性や、高齢の MSM が HIV 検査促進の重要なターゲットとなることが示唆された。

**【結論】**BED アッセイを用いた HIV 感染症の早期診断率の検討から、東京において 2007 年と 2008 年は早期診断率が高かったが、2009 年以降は HIV 検査件数の減少に伴って早期診断率も減少したことが明らかとなった。今回のような検討を続けていくことで、HIV 感染症の拡大阻止や AIDS 発症予防のための効果的な対策を立てる上での一助となることが期待される。